

[ 成果情報名 ] 人工ほだ場における樹種別、種菌別の散水によるしいたけ増収効果  
[ 要約 ] 人工ほだ場で収穫量を増加させるために行う乾燥防止の散水は、夏期の高温乾燥期には午後 2 時から開始し、15 mm / 時で 2 時間程度がよい。散水に適した樹種別の菌種は、コナラでは成形駒 M 2 9 0 ・成形駒 K 1 1 5、アベマキでは成形駒 K 1 1 5、クヌギでは成形駒 M 2 9 0 である。  
[ キーワード ] 人工ほだ場、原木シイタケ、散水効果  
[ 担当 ] 長崎総農林試・林業部・森林資源利用科  
[ 連絡先 ] 電話 0957-26-3330、電子メール ringyou@afes.pref.nagasaki.jp  
[ 区分 ] 林業（特用林産）  
[ 分類 ] 普及

---

[ 背景・ねらい ]

近年増加している人工ほだ場では立地環境の違いで乾燥することが多く、収量が不安定である。このため、適切な散水方法及びその効果を明らかにする。

[ 成果の内容・特徴 ]

- 1 . 散水方法は、散水時間は 15 mm / 時で 2 時間、午後 2 時開始が、夏期の温度低下状況とホダ木重量から最も適している（図 1、2）
- 2 . 樹種による収量は、コナラでは成形駒の使用が効果的であり、M 成（成形駒 M 2 9 0）、K 成（成形駒 K 1 1 5）共に人工ほだ場で散水することにより、18 kg（1 立方 m 当たりの乾しいたけ重量換算、以下同様）以上が得られる（図 3）。アベマキでは、K 成（成形駒 K 1 1 5）が 14.5 kg と多い（図 4）。クヌギでは、M 成（成形駒 M 2 9 0）が 15.5 kg と多い（図 5）。
- 3 . 種菌による収量は K 通（通常駒 K 1 1 5）は、M 通（通常駒 M 2 9 0）に比べ、シイタケ発生が遅い傾向がある（図 3、5）。M 成（成形駒 M 2 9 0）は K 成（成形駒 K 1 1 5）と比べ、収量がアベマキでは少なく、コナラでは変わらないか上回っている。（図 3、4）。
- 4 . 散水処理による収量  
成形駒では、アベマキが効果的である（図 4）。散水処理の効果は K 成（成形駒 K 1 1 5）が大きく、アベマキ、コナラ共に同じである（図 3、4）。

[ 成果の活用面・留意点 ]

- 1 . 人工ほだ場の原木しいたけ栽培に活用できる。
- 2 . 種菌毎の最適樹種、ホダ木の管理方法が異なるので、それらに充分留意する。

[ 具体的データ ]

1. 試験方法 処理は人工ほだ場の散水区（図中では人・散）及び無散水区（図中では人・無）、林内ほだ場（図中では林内）で、7～9月、12～3月に散水種菌は成形駒（直径の6倍植菌）、通常駒（直径の2倍植菌）で各2種類

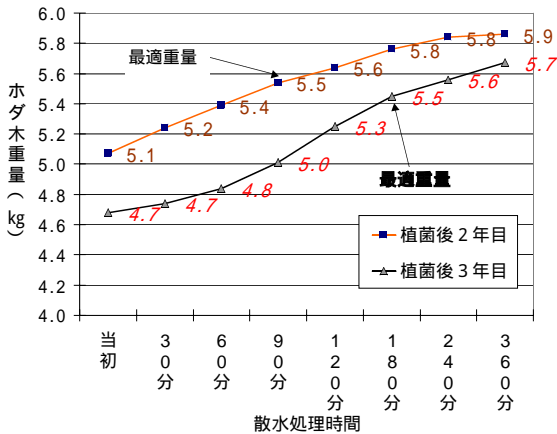


図1 散水处理別重量変化(植菌経過年別:コナラ)

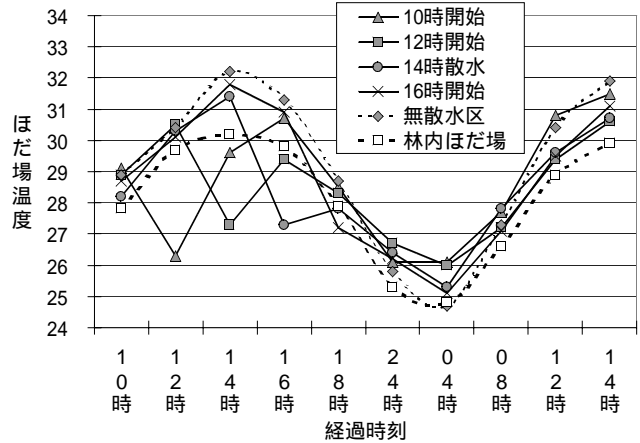


図2 時刻別散水後のほだ場温度(8月)

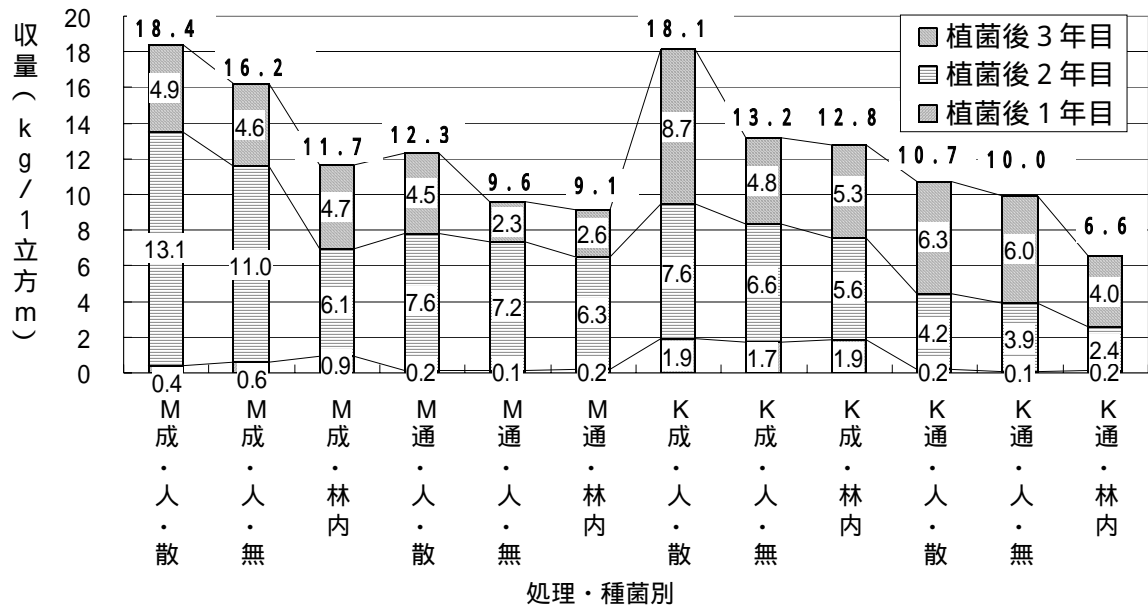


図3 平成12年植菌の年別収量(コナラ)

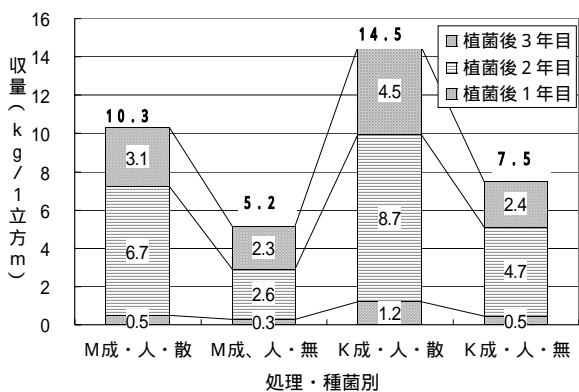


図4 平成12年植菌の年別収量(アベマキ)

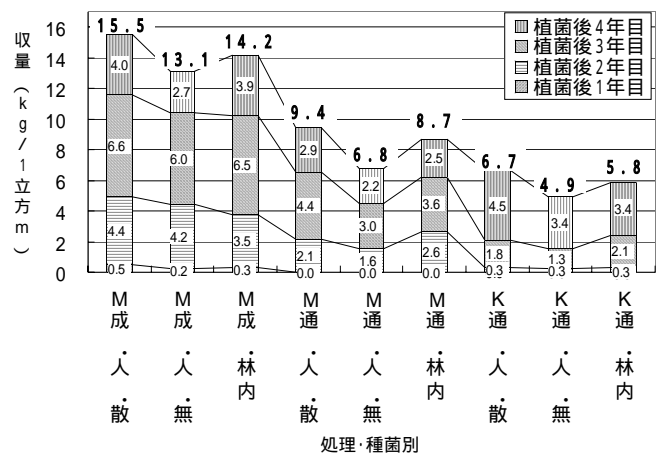


図5 平成11植菌の年別収量(クヌギ)

[ その他 ]

研究課題名：人工ほだ場における原木シイタケ栽培に関する研究

予算区分：県単

研究期間：1999～2003年度

研究担当者：永江 修